

十八、 一道

一本の道を歩むことは、何事を成就するにも大切なことであるが、とくに仏道修行においては、一筋の道を歩みきることが、絶対に必要である。

「念仏者は無碍の一道なり。」

無碍という文字は、尽十方無碍光如来の無碍で、如来に属する文字ではある。しかるに信心獲得の人は如来に生きる人である。

如来の無碍が行者自身のものとなったのである。

「念仏者は無碍の一道なり」とは、念仏者自体が無碍の一道と一体となりおわたたのである。無碍の一道が行者の上に顕われたのである。この家(大磯)の庭には、美しい秋のダリヤが咲いているが、彼は秋と対立してはいない。念仏道もまたしかり、名体不二の如来と行者との一切が対立を超えて、一如一体となりきるのである。これを撰取不捨というのである。

一道とは、一とは唯一であり、道とは絶対道である。ゆえに一道とは、一あつて二なく、とりかえのない絶対道である。これなくしては、道なく、光なく、歓びなく、真実なく、生活なく、生命なく、人格なき絶対必然、至高最勝の大道である。

二つの道がある者は迷う。三つ四つとなさねばならぬことのあるものは、何事を一も成就しない。「二兔を追う者は一兔をも得ず」とは、昔も今も肯かねばならぬ真理である。

真実教は、私に念仏一道を成就すべきことを命ずる。念仏のみ、真実道であることを知らしめる。

人生はきわめて複雑である。あらゆる声、あらゆる事情が、複雑に渦巻いている。その人生の波にまき込まれるかぎり、人の生活もまた複雑極まるものになる。迷う者の心情は複雑である。

しかし、彼岸から人生への声は唯一である。この唯一なる声によって、人生を消化しないかぎり、人は疲れて流転しなければならぬ。

じつと耳を内に転じて心の声を聞けば、心内には複雑極まる声、煮えたぎる湯玉のように、プツプツとおこっている。だれにも聞かされないような三毒煩惱の声が、やみ間もなく吼えつづけている。喜、怒、哀、楽、愛、憎、欲、考えてはならぬこと、思うてはならぬこと、まことに八万四千の煩惱が、われとわが魂を困惑させている。もし一度、その声の一つでもが、わが全体を動かすならば、大変なことになるであろう。今日まで、その煩惱の心の一部が、私の全部になった時、とりかえしのつかぬことを仕出かしてきたのだ。

この心の声を聞いて歩もうとする時、人間の道は、多端になり、峻しくなり、複雑になり、やがて大苦悩となる。されば、世間の声も、心内の声も、私を悩殺するだけで、一本道を歩ませてはくれない。

世には、朝から晩まで、人さえ見れば、雀のようにしゃべらねばおれぬ人がある。じつと内に聞く主を持たぬ人である。何でもないこと、つまらぬことをしゃべりつづけて、人の時間を盗むこと、人を傷つけること、こうした種類の人の呪われた存在であることよ。

あれにも手を出す。これにも手を出す。そして何でもできる。こうした種類の人を「器用貧乏、村ごやし」という。こうした人は、大器にはなれない。

仏道修行の人はとくに気をつけねばならない。一生を傾倒しても、何ほどのこともできないことを思う時、仏の道に生きるものは、その精力のすべてを、開法求道の上に専注すべきである。

聖者は、一行一心に生ききつた人である。

しかるに、凡愚の身をもつて、やたらに手を出して、一生を世話係でおくるがごときは、まことに慎むべきである。

人生における、人間的本能的幸福をも受け、仏道をも成就せんとするがごときは、ついに仏道の何ものであるかを確認することはできないであろう。もしかのごとくくれば、仏道もまた人間趣味の一種となり終わるであろう。

浄土真宗の在家止住のままの宗教たるゆえんは、人間生活と仏道とが対立するのではなくて、人間のあらゆる生活が、仏道成就の資糧となり、舞台となることである。されば、仏道成就、念仏中心の生活の中に一切が統融せらるべきである。かかる生活を成就せんとする者は、まず三塗に根強くはびこるあらゆる貪欲の根を名号によつて智断さるべきである。その時、大厦高楼も賤が伏屋も汝を困惑迷乱せしめないであろう。

如来の教法は、人間の生活を簡単なる一となし、如来の教法を離るる時、その人の生活は、統一なき複雑なるものとなる。

仏道成就の一道に立ち上った者の生活は、迷いなく、停滞なき、易行道である。

武井諦了いわく「善知識はただ一人です。ただ一人の善知識に生きてのみ、やがて百千の善知識に生かされます」と。

久遠の本仏に帰命して、その大信海に生きてのみ、恒沙諸仏の護念証誠はその行者の上にある、

「諸仏の護念証誠は 悲願成就のゆゑなれば

金剛心を得ん人は 弥陀の大恩報ずべし。」

本仏に絶対帰命せずして、諸仏の護念証誠を得んとするも、一仏の冥加もこの人の上にあらず。

大法は一つである。念仏道は唯一絶対である。しかるに「如来大悲の恩徳は……」の恩徳讃も恋の歌も同一価値をもってその耳を打ち、その口に上る。芸術にして宗教にあらず。この域に浮動する者、信用ならず。何となれば、經典聖教の誦誦、浄土依正の觀察、礼拝、称名、讚嘆供養の五種正行において、称名行のみ唯一絶対の正定業であつて、いわゆる前三後一の助業とこの正定業を

「助正ならべて修するをば すなはち雑修となづけたり

一心をえざるひとなれば 仏恩報ずる心なし。」

と聖人は誡められる。五正行における、正助すらなおしかり、いわんや、恋歌をや、俗歌をや。大法は、尊高にして、これにならぶものなし。

善知識なき灰色の大地にさまよう者、灰色なる無人空迥の広野を知らず、群賊悪獸と親しむがゆえに、善知識よりも俗悪者流の上に名を挙げんとするがゆえに、善知識の眼光をさけて逃げん逃げんとし、ついに、何者の前にも頭を下げず、まことにいにだれ人の前にも頭を下げず、下げたりとも、全我全身全霊の事実にあらず。ただ習慣のみ、時に芸術的感情の花火のみ。涙の枯れたる時、そこには、高慢なる凡夫一人歩むのみ。一人の善知識と一如一体になりきらずして、百千の善知識を得ることあたわざること、武井諦了の言のごとし。

真の善知識は、必ず、不動不拔金剛の大信に独立する人を造る。しこうして、何ものをもつてもこれを繋がず。

仏道成就は易し。ただ教法に忠実なることによつて、仏道成就は易し。

蓮如上人いわく、

「同行、善知識にはよくよく近くべし。『親近せざるは雑修の失なり』と礼讚にあらはせり。悪しき者に近づけばそれには馴れじと思へども悪事よりよりにあり、ただ仏法者には馴れ近づくべき由仰せられ候。俗典にいはいはく『人の善悪は近づき習ふによる』と。また『その人を知らんと思はばその友を見よ』といへり。『善人の敵とはなるとも、悪人を友とすることなかれ』といふ事あり。」

この『御一代聞書』のただの一節でもが、終生の守り本尊となつた時、その人の上に何が成就するであろうか。

「同行善知識にはよくよく近くべし。親近せざるは雑修の失なり。」

ああ。これさえ、仏道成就の、雑修の失とのたまうか。如是、如是。

世に、同心念仏の同行善知識に近づきて、ともにみ法を語るほどありがたいことはない。しかるに、これに親近せざるに至れば、そこには何が動いているのであるか。

教家は、声の美しさを要せず。能弁なるを要せず。その他何ものをも要せず。

ただ道理を語るを要す。己のものになりきつた道理を語るを要す。

道理の至極は『大無量寿経』である。

道理とは、法である。法を聞き、法を信じ、法を生き、法を語ることに、それだけで、尽きせぬ満足とよろこびがある。それ以外のものを法を聞くことによつて求めてはならない。法を聞き得たことが人間の最大の幸のすべてである。

念仏道は、うすぼんやりした世界ではない。これを生きれば生きるだけ、これを聞けば聞くだけ、これを念ずれば念ずるだけ、いよいよ明らかに信心成就し、これに生きる人を見れば、瞭然として「顕真実浄土云々」の顕の字を人の上に揮うことができる。

一道は人の上に顕現して日月とともに輝く。